

発刊にあたり

自然の力の前に人間が作った人工物のなんと脆かったことでしょうか。そして、自然の木々のなんと逞しいことでしょうか。英知を絞って造った高速道路やビルよりも、自然の木々のほうが何事もなかったかのようにそよそよと生えています。そして倒壊しかけた家屋を街路樹が支えていた姿は、それを象徴しているようでした。

しかし、どんなに声を大にしたところで、あのときの揺れを人に伝えることはできません。正に筆舌に尽くし得ない体験でした。覚悟も予測もしていない人々が、いきなり奈落の底へたたき落とされ、すべてはそこ(底)から始まったのです。

目に見えるところは随分片づいて復興の槌音が響いているところもありますが、未だ更地のままのところもあります。いわんや崩壊した姿のまま放置されている建物もまだまだ多いのが現実です。この風景は、そのまま神戸、阪神間に住む人々の今の心の様(さま)と同じです。そしてこの景色も、すべて『とき』とともに風化していくでしょう。

体験していない人々の『記憶』に止めることは困難であっても、『記録』に止めておくことはできます。今、人々は、それぞれの組織で、また個人やグループで震災の記録を、そして『震災後』を記録として残そうとしています。歴史の中に埋没させるのではなく、もしまたいつかどこかで災難が降りかかったときに、この記録が少しでも役立つことを願い、また、日常生活では隠れていた問題解決の糸口として、われわれが体験してきたことを伝えたいと思っています。

医療分野にあっても、さまざまな問題点を指摘され、有事に機能したシステム、全く機能しなかったシステムの検証が行われています。厚生省や兵庫県などは、震災後の活動を分析し、初動の救命救急段階から中長期的なケアや心のケアをマニュアル化、システム化すべく検討を続けていますが、そのような中で『歯科医療保健はどうあったのか、『歯科医師』という立場はどうであったのかは、残念ながら、プライオリティからみて十分に論議される環境にありません。

そこで、われわれは、兵庫県歯科医師会をおいて他にはそのことを記録できないという認識に立ち、今回の発刊に至ったという経緯があります。これは、兵庫県歯科医師会が対外的、対内的にどう動いたのかという会からの発信の書であり、マニュアルではありません。あくまでも活動を再現し、平時には見えないことが有事に露呈したという事実と、その事実に基づいて問題提起をしたつもりであります。

本書が、歯科医師会はじめ関係の方々の何らかの参考になれば幸いです。

最後に、発刊に際し、多くの方々のご協力を得たことを深謝します。